

## 2021 年度 日本造園学会北海道支部大会案内

- 主催 : 公益社団法人 日本造園学会北海道支部  
共催 : 一般社団法人 ランドスケープコンサルタンツ協会北海道支部、  
一般社団法人 北海道造園緑化建設業協会  
後援 : 国土交通省北海道開発局、環境省北海道地方環境事務所、北海道、  
札幌市、恵庭市、公益社団法人日本都市計画学会北海道支部、  
特定非営利活動法人ガーデンアイランド北海道、  
第 39 回全国都市緑化北海道フェア実行委員会

### ◇大会スケジュール・会場

会期：10 月 16 日（土）

会場：WEB 開催（北海道支部ホームページ特設サイト：<https://www.jila-hokkaido.com/>）

9:00 開会

9:05～11:00 研究・事例口頭発表

11:15～12:15 研究・事例ポスター発表（ポスターセッション A）

<休憩>

13:00～14:15 研究・事例ポスター発表（ポスターセッション B）

14:30～ 基調講演・シンポジウム

「花のまちづくり－北の暮らしとガーデニング」

北海道においては、市民活動や行政による花のまちづくり活動が取り組まれてきました。ガーデンアイランド北海道、ガーデンツーリズムに加え、2022 年には全国都市緑化北海道フェアの開催も予定されています。

これまでの活動を振り返り、道内外の最近の活動について学び、今後の北海道らしい花のまちづくりの展開について議論します。

基調講演「北海道における花のまちづくりの進展について」 (有) 緑花計画 笠 康三郎 氏

パネルディスカッション「花のまちづくりと暮らし」

パネリスト（順不同）

「美しい街で暮らそう・恵庭花のまちづくり」

(株) サンガーデン 土谷 美紀 氏

「とっとりフェアから 8 年・・・鳥取の緑化はどう変わったのか」 (株) 遠藤農園 遠藤 佳代子 氏

「英国チェルシーフラワーショーの花のまちづくりと人が主役の庭づくり」

未季庭園設計事務所 佐藤 未季 氏

コーディネーター

日本造園学会北海道支部副支部長／(株) ドーコン 福原 賢二 氏

17:30～ 支部総会・閉会式（表彰式含む）

### ◇問合せ先

日本造園学会 北海道支部事務局

005-0864 札幌市南区芸術の森 1 丁目 札幌市立大学デザイン学部内

担当：椎野亜紀夫 TEL 011-592-2617 Email：a.shiino@scu.ac.jp

北海道支部に関する情報は、北海道支部 web サイト (<http://www.jila-hokkaido.com>) および、メーリングリスト「北の造園広場」にてご案内します。最新の情報をお受け取りになりたい方、また北海道内の日本造園学会会員の方は、メーリングリストへのご加入をおすすめします。北海道支部ホームページ内の登録フォームより、お申し込みください。

# 2021 年度 日本造園学会 北海道支部大会 シンポジウム 花のまちづくりと暮らし

2022 年は北海道恵庭市をメイン会場とした、第 39 回全国都市緑化北海道フェアが開催される。

近年では、多様な花に彩られた商業施設や園地、個人宅を多く見かけるようになり、人々の暮らしの中に花が浸透してきていることを感じる。これらは単なるブームではなく、花がまちづくりや暮らしに定着していると言える。その契機となったのは、1990 年に大阪で行われた国際花と緑の博覧会と言われており、暮らしの中に花を用いる園芸手法をガーデニングという言葉で表された。以降、メディアでも多く取り上げられ、世間の関心事の一つとなっていった。

2019 年 4 月には、国土交通省が地域の活性化と庭園文化の普及を図るため、ガーデンツーリズム登録制度が創設されたが、北海道ガーデン街道はその先行事例として制度創設のモデルとされ、同年 5 月に第 1 回登録で認定された。

このように、北海道では恵庭市をはじめ、昭和 30 年代から花のまちづくりと暮らしが実践されてきており、独特の景観や観光資源を生み出してきている。

とは言え、日々、花と向き合うのは大変な知識と根気と経験が必要である。また、人々を魅了するガーデンをデザインするには、豊富な知見と表現力が必要である。

今回のシンポジウムでは、花のまちづくりと暮らしを支える造園家、ガーデンデザイナー、ガーデナーを招き、植物に注ぐ情熱や苦心などを伺いつつ、2022 の全国都市緑化北海道フェアに向けた期待や今後の北海道におけるガーデニングの可能性について議論を重ねたい。これまで約 30 年にわたり、全道各地で園芸技術の普及、まちづくり活動の支援、公園やガーデンの整備、管理運営の指導、ボランティアの育成などに関わってきた。これらを振り返りながら、北海道における花のまちづくりの特徴を整理すると共に、今後の展開について課題を提起していきたい。

## コーディネーター

日本造園学会北海道支部 副支部長  
(株) ドーコン 都市地域事業部  
福原 賢二

## 【略歴】

千葉県千葉市出身。1987 年東京農業大学農学部造園学科を卒業後、北海道開発コンサルタント株式会社（現：株式会社ドーコン）に入社。中島公園の改修や国営滝野すずらん丘陵公園など公園緑地の計画・設計等に従事。2013 年から 2021 年にかけて石巻南浜津波復興祈念公園の計画・設計を担当。現在は 2022 年開催予定の第 39 回全国都市緑化北海道フェア会場設計に携わる。

# 北海道における花のまちづくりの進展について

(有) 緑花計画

笠 康三郎

これまで約 30 年にわたり、全道各地で園芸技術の普及、まちづくり活動の支援、公園やガーデンの整備、管理運営の指導、ボランティアの育成などに関わってきた。これらを振り返りながら、北海道における花のまちづくりの特徴を整理すると共に、今後の展開について課題を提起していきたい。

## 《北海道の自然環境が味方した》

- ・ 道南、道央、道北、道東と、性格の異なる地域の自然環境が存在している。
- ・ 梅雨や酷暑がなく、春に植えた花苗が、秋まで咲き続けられる環境は北海道ならではの。
- ・ 多くの宿根草が、ストレスなしに生育できる環境が広がっている。
- ・ 道内の環境に適した植物苗の生産者が身近に存在し、多彩な植栽が可能であった。

## 《行政がとても熱心だった》

- ・ 道庁のまちづくり推進室が起点となった。
- ・ 各市町村においても、もともと生活環境整備や農村美化活動などが盛んだった。
- ・ そこに都市計画とは異なる、住民も参加したまちづくりの概念が浸み込んでいった。
- ・ どこが先頭になるのではなく、同時多発的に花のまちづくりが進展していった。

## 《人づくりに成功した》

- ・ 北海道によるフラワーマスター認定制度の果たした役割は極めて大きい。
- ・ ブレイズによるオープンガーデンネットワークも画期的な取り組みとなった。
- ・ 花新聞やまいろふえによる情報発信も、活動を強力に後押しした。
- ・ 各種出版物やガーデニング検定などにより、ガーデナーのスキルアップが図られた。
- ・ 全道的な横の繋がりがこれほど密接かつ強固な地域は、他では見られないのではないかと。

## 《今後の課題》

- ・ これまでの活動の広がりや深みは、十分なほど展開されてきている。
- ・ むしろ行政が、それらを十分に活かしていくことができているのではないだろうか。
- ・ 私たち第 1 世代から次の世代へ、なにをどうやって伝えていけばよいか問われている。
- ・ 今一度私たちの生活を見直し、私たちの暮らしそのもの、取りまく環境の魅力の再確認より、その中に花をどう活かしていけばいいのか、よく考える必要がある。

## 【略歴】

(有) 緑花計画代表取締役。北大農学部非常勤講師、NPO ガーデンアイランド北海道理事  
松山市出身。北大農学部卒業後、自営業、札幌市緑のセンター、造園会社、建設コンサルタントを経て、2003 年 (有) 緑花計画 設立。滝野公園カントリーガーデン、道南四季の杜公園、大雪森のガーデン、北彩都ガーデンなどの整備に関わるほか、各地での講演・講習会や、新聞雑誌等への寄稿により、園芸文化の普及に努めてきている。

## 北海道におけるガーデン等の整備状況と花のまちづくり活動の動き

1986	S61	さっぽろ花と緑の博覧会（札幌百合が原公園）	
1987	S62		
1988	S63		
1989	H01		
1990	H02	恵庭 花とくらし展 スタート	北海道景観アドバイザー制度スタート 国際花と緑の博覧会（大阪）
1991	H03	大通公園花壇40周年記念	花のまちづくりコンクール開始（日本花の会）
1992	H04	紫竹ガーデン 開園 ファーム富田 拡張整備全面オープン	私の部屋ビズ BISES 創刊
1993	H05		北海道フラワーマスター認定制度スタート 花フェスタ札幌 スタート
1994	H06	十勝正直村 日新の丘 開園	
1995	H07		
1996	H08	第7回全国「みどりの愛護」のつどい（滝野公園）	北海道花と緑のまちづくり賞スタート
1997	H09		「ガーデニング」流行語大賞入選
1998	H10		
1999	H11		
2000	H12	滝野公園カントリーガーデン 開園	花新聞ほっかいどう創刊 緑・花文化の知識認定試験 開始（2009年第11回まで） ボランティアサポートプログラム スタート ジャパンフローラ2000（淡路花博）
2001	H13	ゆにガーデン 開園 上野ファーム 公開開始 大通公園花壇50周年記念	北海道北のまちづくり賞に改編 滝野公園フラワーガイドボランティア活動開始 ブレインズ Brains 活動開始
2002	H14		まいろふえ創刊 日本ハンギングバスケット協会北海道支部結成
2003	H15		ガーデンアイランド北海道（G I H）誕生 パシフィックフローラ2004（浜名湖花博）
2004	H16	園芸福祉全国大会 in 北海道（北広島市・恵庭市）	
2005	H17		
2006	H18	えこりん村 銀河庭園 開園	花のコンシェルジュ養成開始
2007	H19	ノーザンホースパーク K'sガーデン 開園 六花の森 開園	
2008	H20	ガーデンアイランド北海道2008開催 花のくに日本運動推進大会 in オホーツク（遠軽町） 日本ハンギングバスケット協会全国マスター会（滝野公園） イコロの森 開園 ・ 十勝千年の森 開園	G I Hガーデンブック刊行開始
2009	H21	風のガーデン開園 北海道ガーデン街道誕生	さっぽろタウンガーデナー制度 運用開始 北国のガーデニング知識検定 開始（2019年第11回まで）
2010	H22	全国オープンガーデン交流会 in 北海道 恵庭市花いっぱい文化協会創立50周年	ブレインズ「OPEN GARDENS of HOKKAIDO」10周年記念号
2011	H23	北海道ハイウェイガーデン オープン 大通公園花壇60周年記念	
2012	H24	第1回北海道ガーデンショー開催（清水町）	
2013	H25	花の街づくりコンクール20周年記念（北広島市）	
2014	H26	大雪森のガーデン 全面オープン	
2015	H27	第2回北海道ガーデンショー開催（上川町、旭川市） あさひかわ北彩都ガーデン 全面オープン	英国王立園芸協会日本支部（RHSJ） 解散
2016	H28	十勝ヒルズ リニューアルグランドオープン	花新聞ほっかいどう 休刊
2017	H29		ガーデナーズ勉強会 スタート ビズ BISES 休刊
2018	H30		
2019	R01	日本ハンギングバスケット協会全国マスター会（滝野公園） チェルシーフラワーショウ「Gold」受賞 柏倉一統&佐藤未希	ガーデンツーリズム登録制度創設 コテージガーデン月形本店 営業終了
2020	R02	恵庭市はなふる開園	
2021	R03		まいろふえ 休刊
2022	R04	全国都市緑化北海道フェア 開催予定（恵庭市はなふる）	北海道フラワーマスター制度30周年

# 美しい街で暮らそう・恵庭花のまちづくり

(株) サンガーデン  
土谷 美紀

## 恵庭花のまちづくりの展開

1991年市制施工20周年記念事業「恵庭花と暮らし展」は、恵庭が花のまちづくりを目指すきっかけとなりました。その後 恵み野を中心として、花・庭・オープンガーデンや有志によるガーデンコンテスト が、人と人のつながりを作ることを実践してきたと思います。

ベースには 60年続く花いっぱい文化協会の活動が続いていたこと。

花苗生産地であり、供給体制が整っていた背景があります。

2005年道の駅・えこりん村がオープン。恵庭の花観光を考える大きな転機になったと感じます。

昨年 市制施工50周年を迎え 花の拠点 はなふる がオープンしました。

「花の拠点」は父（サンガーデン 創業 藤井哲夫）が 花のまちづくりプランを作る時に、夢として実現したい項目にあげていたものでした。

その時には、冬に華やかな花風景が見られる観光音質を想像していたようです。はなふるは今の時代背景にあった、今後の30年を作っていく、次世代の 花のまち恵庭のベースになると思います。

これまでのように 多くの市民が関わり、行政が支える仕組みが継続の鍵。  
続けていく努力を惜しまず続けたいと思います

### 【略歴】

1989年より家業（株）サンガーデン に従事。

花の装飾や工事担当。

2020年オープン 恵庭市都市公園 はなふる「虹色の鳥」デザイン。

はなふる の施工・管理メンテナンスを行なっている。

## とっとりフェアから8年・・・鳥取の緑化はどう変わったのか

(株) 遠藤農園  
遠藤 佳代子

### とっとりナチュラルガーデンのはじまり

平成25年秋に開催された「第30回全国都市緑化とっとりフェア」では「ともに育てる身近な緑」を開催テーマに、自然を大切にしながら楽しむ鳥取の心を、全国に発信し、県民と共に鳥取の風土を活かした緑化を協働により推進することで、鳥取らしい魅力あふれるまちを育む契機とした。中でも県民が、身近な緑を暮らしに取り込み、楽しむ庭づくりのスタイル「鳥取流緑化スタイル」の創造や発見を目指し、その庭づくりを実際に行う手法として「ナチュラルガーデン」が提起された。

### とっとりナチュラルガーデンとは・・・

鳥取県は変化に富んだ地形や気候条件から、北方系植物の南限地、南方系植物の北限地になるなど野山や海辺を歩くと多種多様な植物を見かける。そんな植物たちをお手本に、植物が本来持っている自然の力を活かした庭づくりの手法で、四季の移ろいに見せるいろいろな表情を組み合わせ、美しく仕上げる。肥料や農薬を使わないのでとても環境にやさしい手法である。だからどんなスタイルのお庭にも取り入れることができる。地域のいいところを発見できるので「地方創生」な庭づくりともいえる。そして、このフェアを機に、地元の植物が見直された。

### 県民との協働、民間企業の協力

○メイン会場はそのまま残り、県民の憩いの場所へ定着

世界ジオパークに認定された山陰海岸のジオスポットである湖山池の湖畔の庭園は、ととりの自然緑化の集大成。鳥取に自生している樹木や多年草を中心に、210種ある植物の94%は日本原産の自生種。周囲の自然と溶け合い美しい風景を楽しませてくれる。

○とっとりナチュラルガーデンマイスターの養成

当初、県が中心となって鳥取流緑化スタイルの「ナチュラルガーデン」を広く普及し、指導者となって活躍する人材「とっとりナチュラルガーデンマイスター」の養成が行われた。翌年から引き続き5年間、私共が中心となって養成講座を続け、新たに56名のマイスターが誕生した。現在、県内各地で、それぞれのマイスターが活躍して、普及に励んでいる。

○民間企業の協力によるナチュラルガーデンの普及

大江の郷自然牧場：年間来園者30万人を超える鳥取の人気のガーデンカフェも、庭づくりに「ナチュラルガーデン」を導入。広く県民に「ナチュラルガーデン」を知っていただくきっかけとなった庭のひとつ。

スーパーMARUI：駐車場65台分のスペースを地域の方の緑化にとガーデンを作る計画に「ナチュラルガーデン」の手法を導入。スーパーの名前も「MARUIナチュラルガーデン国府」となり、2017年から「MARUIナチュラルガーデンクラブ」発足。当初5名のメンバーが16名になり、年間6回のメンテナンス作業でガーデンの維持管理をしている（内、マイスター6名活躍中）。

## 現在の状況について

県民55万人を切った小さな鳥取県ですが、フェアから8年。今も自分たちのできることを見つけそれぞれのマイスターも活躍している。鳥取県の緑の伝道師に登録していれば、講師派遣費、材料費の補助など、鳥取県の応援もある。課題として、公共の庭（鳥取市の公園）の植物を他の市町村株分けして移植ということが難しいようである。

例えば、湖山池のナチュラルガーデンの庭が「植物バンク」のような働きを持った庭になると地元育ちの植物がまちなかに広がり、鳥取の土地の個性を深めることになるであろう。「地元の素材でふるさとの景色をつくる」ポール先生の言葉のようになったら、鳥取はもっとすてきなまちになるだろう。

### 【略歴】

鳥取フェアの開催一年前から、事務局に勤務し、フェアの準備から開催に携わる。

とっとりナチュラルガーデンマイスターの一期生。

果樹苗木生産から、造園の設計施工を手掛ける株式会社遠藤農園に勤務。

# 英国チェルシーフラワーショーの花のまちづくりと人が主役の庭づくり

未季庭園設計事務所  
佐藤 未季

## 英国チェルシーフラワーショーに見る花のまちづくり

2019年、「人々の健康と幸せを願う庭」をコンセプトに、北海道で生育する薬効のある草木と魯班尺の吉数でデザインし、北国の春の雪解けの喜びを表現した「漢方の庭」は、道内外451の企業と個人スポンサーに支えられRHSチェルシーフラワーショーに出場し、金賞を受賞した。会期5日間で世界中から16万9000人が訪れた花博の概要と研究・教育分野や造園業界への波及効果、フラワーショーの熱気に包まれるロンドンの街について紹介する。

## イギリスにおける暮らしとガーデニング

庭で育てたカリンをジャムにして食べたり、季節の草花を収穫して花瓶に生けたり、庭に咲く花の話からコミュニケーションが生まれ、コミュニティーが広がるイギリスでの日々の生活と深く結びついたガーデニングについて紹介する。

## 恵庭市花の拠点はなふる「大きなカステラが焼けるお庭」のデザインについて

道内在住のガーデナーや恵庭市民によってデザインされた7つのガーデンの中の1つである「大きなカステラが焼けるお庭」のデザインについて説明する。このガーデンの名前は、とても有名な絵本からオマージュをうけて、自由に仲良くみんなで分かち合う世界観が広がる場所になって欲しいという想いを込めて名付けた。ガーデン内には、ダイニングテーブルやライブラリー、小さな芝生広場、小さな果樹園、木立と草原があり、ピクニックシートを広げてピクニックを楽しんだり、寝そべて本を読んだり、パーティーをしたり、楽器を演奏したり、ベリーの収穫を楽しんだり、自然とコミュニケーションやコミュニティーが生まれても、生まれなくても良い自由なサードプレイスとして使える空間を目指して設計・デザインを行なった。

### 【略歴】

北海道幕別町出身。大阪大学法学部卒業後、英国にあるリトル・ユニバーシティ・カレッジにて造園、インチボールド・スクール・オブ・デザインにてガーデンデザインを学ぶ。ヒリア樹木園、アダム・フロスト・デザインにて研修。帰国後、植栽設計を担当した北彩都ガーデン（旭川市）は、造園学会賞受賞/IFLA APR Awards 2017 最優秀賞を受賞（高野ランドスケーププランニング株式会社）。RHSチェルシーフラワーショー2019「漢方の庭」にてゴールドメダル受賞。